終助詞「ヨ」の機能に関する一考察*

中 崎 崇

1. はじめに

これまで終助詞「ヨ」の研究は、様々な観点から分析が試みられてきた。例えば古くは、「聞き手に對して、話手の意志や判断を強く押しつける表現」時枝(1951)、「念を押すような場合、軽く言い張るような場合、それから勧誘やおねだりや命令(勧告の心もちを含めての)などの場合に一般に使われる」佐久間(1952)など聞き手との関係やその存在を前提とした対人的な聞き手の態度として「ヨ」を分析、記述するもの。また大曾(1986)、陳(1987)、益岡(1991)、メイナード(1993)など80年代以降盛んに行われた情報(知識)や認識といった概念を用いて終助詞を分析するものなどがある。その他「ヨ」を「ネ」との対立項としてとらえる考え方を批判し「ヨ」の分析を行った白川(1992)や「ヨ」との待遇性や使用制約といった点に注目した伊豆原(1994)、楠本(1995)などもある。このような一連の「ヨ」の研究¹⁾によってある程度「ヨ」の意味・機能が明らかになったが問題点がないわけではない。

そこで本稿の目的は、従来の研究、特に情報・認識論の観点に立つ研究では説明困難な終助詞「ヨ」の使用に注目し、そのような場面で用いられる「ヨ」がどのような機能を持ち使用されるのかを明らかにした上で、最終的には終助詞「ヨ」には少なくとも三つの機能が備わっていると主張することにある。

2. 問題の所在

これまでの情報・認識論の観点に立つ「ヨ」研究の主張は、概ね「ヨ」が「基本的には話し手側に情報があると見なされる場合に使われる」「ヨが付加された文の内容を聞き手に押し付ける・主張する、または聞き手が認識すべきであることを示す」とまとめることができると思われるが、いくつか説明困難な使用例が存在する。まず田窪(1992)などでも指摘があるように「ヨ」は「話し手」と「聞き手」の知識や情報の間に何らギャップもしくはずれの存在しない聞き手の情報に関する発話に付加される。次のような場合がそうである。

- (1) (妻の反対をよそに市長選に立候補する芳彦)

芳彦：市長選に立候補するよ。

房子：あなた……(絶句)(中略)本気でいってるの？

芳彦：むろん本気だ。

房子：やめてください。あなたは大学の先生ですよ。

『善人の条件』(’92年鑑代表シナリオ集)映人社

(1)の「芳彦が大学の先生だ」という自分の職業に関する情報は聞き手にとり自明で、「ヨ」の機能を話し手側に情報があるという想定を表すとすると説明困難な例である。次にこれまでの「ヨ」の研究は、「ヨ」が聞き手の存在する対話場面においてもっぱら使用されるという前提で分析されてきたが実際の言語事実に照らし合わせてみると次のような聞き手を想定しない場面で「ヨ」を用いる例が少なからず存在する。

- (2) (鏡を見て髪の毛をセットしている未夢)

未夢：あーん、もう、また(髪が)はねてるよー。 テレビアニメ『だあ!だあ!だあ!』

(2)は聞き手が存在しない独話場面での発話である。つまり聞き手との情報関係を想定できない場面での発話であり、聞き手を想定した規定からでは説明困難な例である。また「ヨ」を対人的な聞き手の態度として規定した場合においても聞き手の存在しない場面での発話は説明困難な例である。この他「ヨ」は使用頻度の差異はあるにせよ、述べ立ての文のみならず働きかけの文や問いかけの文にも使用される。

- (3) 片岡：それじゃ、ごちそうさま。

藤村：今度は票を持って来いよ。

片岡：へっへっへー。

『善人の条件』(’92年鑑代表シナリオ集)映人社

- (4) カオル：誰？(と女の子を窺って)

永井：彼女？

カオル：もてるんだなあ。

永井：普通だよ。

カオル：どうやって知り合ったんだよ？

永井：自然にさ。

映画『バタアシ金魚』(原作：望月峯太郎)

- (5) (父の敵であるアルウィン男爵の追放に成功したロビンは、国王から王立騎士団の一員になら

ないかと誘いをうける。騎士団の一員になると恋人のマリアンをおいて都に行かねばならず悩むロビン。そんなロビンにマリアンは都行きを勧めた。そのことを聞いたロビンの友人で山賊の頭のリトルジョンとマリアン達との会話)

リトルジョン：なんだとおー。

それでマリアン、おめえはロビンに行けて言ったのかよ？

マリアン：ええ。

テレビアニメ『ロビンフッドの大冒険』

(4) や (5) のような問いかけの文の場合、話し手と聞き手の情報の帰属は述べ立ての文の場合とは全く逆になってしまう。この場合も従来の規定からでは説明が困難である。このように従来の規定では扱いきれない「ヨ」の存在が指摘できる。次節から上記のような問題点を踏まえ「ヨ」の機能について考察を試みる。

3. 「ヨ」の機能

ここでは本稿が主張する終助詞「ヨ」に備わる三つの機能について、2. で指摘した問題点を踏まえ順次考察していくことにする。

3. 1. 「ヨ」の機能①

確かにこれまでの研究で指摘されたように、「ヨ」が聞き手の知らない事実を伝えたり、自己の意見や心情を述べるといった話し手側に情報があると見なされる場合やそういった情報を聞き手に主張する場合に用いられ、そのような使用が「ヨ」の使用の多くを占める。

(6) A：何なんだあのじいさん。

B：このへんじゃ有名な狐師です。もとは東北のマタギのシカリをやっていたそうですが。この山でジュウベイに出会って以来、ここで腰を落ち着かせているみたいで。

アユミ：マタギのシカリ？

コナン：狐師集団のボスのことだよ。

テレビアニメ『名探偵コナン』

(7) エリス：要はバグによるプログラムエラーなわけだから、ここから侵入してそれを直せばすべては解決するじゃない。

銀河：ほおー。

北斗：いや、学校のサーバーに侵入するなんて大変だよ。

銀河：でもできるんだろ。

北斗：無理だよ。

エリス：できるわよ。

テレビアニメ『GEAR 戦士 電童』

しかし「ヨ」の規定に「話し手側の情報」を入れてしまうと、2. の問題の所在でも指摘したが問いかけの文での情報帰属の逆転の問題や働きかけの文における情報の規定や帰属をどのようにするのかといった問題を引き起こしてしまう。そこで本稿では、(6) (7) のような聞き手に発話や発話内容を強めるといった伝達的な役割の強い「ヨ」の機能を「言述、命じ、尋ねといったいわゆる発話の力 (illocutionary force) を話し手が聞き手に強調する²⁾」ものと規定しておく。例えば述べ立ての文である (6)、働きかけの文である (3)、問いかけの文である (4) (5) の場合それぞれ、「～と述べている」「～と命じている」「～と尋ねている」という命題に対する話し手の述べ方 (発話の力) についての強調要素として働いていると考える。強調要素であるが故、その付加は随意的であり付加要因³⁾ は様々考えられる。当然強調する相手、つまり聞き手の存在が不可欠であるので聞き手が必ず存在する場面でしか使用できない。これは次のように当該の発話が聞き手不在で使用されるかを「と思う」といった思考動詞との共起関係で判断する「と思う」テスト⁴⁾でも証明される。

(5') ? マリアンはロビンに行けって言ったのかよ、と思った。

(6') ? 狐師集団のボスのことだよ、と思った。

(7') ? (いや) 学校のサーバーに侵入するなんて大変だよ、と思った。

以上、「ヨ」が基本的にすべての文タイプに後接するといった問題を手がかりに、「ヨ」に「言述、命じ、尋ねといったいわゆる発話の力を話し手が聞き手に強調する」といった機能が備わっていることについて述べた。

3. 2. 「ヨ」の機能②

2. でも議論したように「ヨ」には、(2) や次の (8) のように対話場面ではなく独話場面に使用される発話^{5) 6)} が存在する。

(8) (8時頃にピザが配達されるように注文したレオ。しかし7時すぎに家のチャイムがなり、ドアをノックする音が聞こえる)

レオ：もお、早過ぎるんだよー。

今来たっておなかすいてないし。

テレビアニメ『学校の怪談』

このような聞き手の存在しない独話場面においては、「ヨ」の機能の規定に聞き手の存在を前提とした説明では、擬似的に自己を分裂させ話し手自身を聞き手として想定でもしない限

り説明がつかない。仮にそのように考えたとしても、(2)や(8)のような話し手が自らの感覚器官によって知覚できる眼前の事態について、もう一人の自分に強調するといった行為を意味のある行為として捉えるのはいささか苦しいように思える。またこの場合の話し手がただ単に事態(2)や(8)そのものを認識したことを述べているとも考えにくい。

本稿ではこのような発話を行う話し手の意図は、「残念に思っている」「遺憾に思っている」「快く思っている」といった当該事態に対する話し手の心的態度 (propositional attitude) を表すことにあるのではないかと考える。またそのような発話に付加される「ヨ」は、当該事態に対する心的態度を表す「あーん」「もお」「くそっ」といった語句と同じく発話で表現された事態に対する話し手の心的態度を明示する装置として働いていると考えられる。

(9) 未夢は、(2)の事実を遺憾(不快)に思っている。

(10) レオは、(8)の事実を遺憾(不快)に思っている。

つまりこの種の「ヨ」を付加させることによって、話し手は上記のような事態に対する心的態度の存在を顕在化させているのである。このようにある事態についての心的態度を表すことは必ずしも聞き手の存在を前提とせず、それ故この種の「ヨ」が独話場面にも現れえるのである。先ほどの「と思う」テストにおいても「くそっ、と思った」と言えるのと同様に

(11) 未夢(私は鏡を見て)「また(髪の毛が)はねてるよー、と思った」

(12) レオ「(注文したピザが来るのが)早過ぎるんだよー、と思った」

「ヨ」が付加された発話も上記のように話し手の思考内容を取り上げる引用部の内部に入ることができる。このことは、この種の「ヨ」が聞き手非存在でも成立する文であることの証明となろう。また次のように

(13) (A 首相に代わる首相として B 首相が選ばれた際)

田中議員：あー、また派閥抗争やってるよー、って思いましたもん。

(14) (美女に目がない探偵毛利。性懲りもなく美人の依頼者のためスーツで現れる)

毛利：お待たせして申し訳ありません、マドマーゼル。少々難解な殺人事件の書類に目を通していたものですから。

池波(依頼者)：はあー。

毛利：さあ、さあ。ソファーに腰を下ろして事情を話す前のその高鳴った鼓動を御静め下さい。

蘭！何か御飲み物を。

蘭：はい。

コナン：(まーた、はじまったよー)

テレビアニメ『名探偵コナン』

実際の発話として話し手の過去の思考内容として提示する例や漫画や小説などで心内発話として表現された例も見受けられる⁷⁾。

またこの機能を有する「ヨ」は、対話場面にも用いられる。次の発話を見られたい。

(15) (この間受けた模擬試験の結果が返ってきてそのことについて話し合う生徒達)

男子生徒A：どうだった、統一模試。

男子生徒B：だめだめ。ランキングにかすりもしないよー。

男子生徒C：俺もだよー。 テレビアニメ『びたテン』「新しいともだちの迎え方」第6話

(15) の話し手 (男子生徒 B・C) は、それぞれ「自分が (成績優秀者の) ランキングにかすりもしない」「自分もランキングにかすりもしない」といった事態の伝達を目的としている。しかしこの場合単にこれらの事態について伝達することだけを目的としているのではなく、「ヨ」の付加によって次のように

(16) 男子生徒B：自分がランキングにかすりもしない事実を遺憾 (不快) に思っている。

男子生徒C：自分もランキングにかすりもしない事実を遺憾 (不快) に思っている。

事態に対する話し手の心的態度の存在までを含めて伝達することを目的としている。もちろん「ヨ」の存在がなければ聞き手がそういった心的態度の存在に気づかないわけではない、心的態度を有していることを示すために付加が義務的なわけでもない。この場合話し手は、話し手の事態に対する心的態度までが話し手の情報意図であることをより確実に伝達するために「ヨ」を付加し、また聞き手は「ヨ」の存在によって「ヨ」を手がかりとして話し手の情報意図の復元が容易になり、話し手の発話の意図をより確実に解釈するのである。

この種の「ヨ」の機能を本稿では、「当該の発話が発話に対する話し手の心的態度 (遺憾・不快等) を有していることを述べる」(心的態度の顕在化) ものと規定する。この種の機能を有する「ヨ」は、「と思う」テストからもわかるように独話用法を持ち、通常「ヨ→」といった伸ばす下降調のイントネーションを帯びることが多いといった特徴があげられる。

またこの種の「ヨ」は、述べ立ての文に限らず以下に示すとおり様々な文タイプに付加される。例えば次のような文である。

(17) 遊介：へい！お待ち！「海賊風ぶっこみみそうどん」！

山沖：遊介よー。うどんかよー。暑いぞー。

遊介：真夏にアツいうどん食ってタププリ汗かいてあとは海に飛び込む、スカッとしますよ。

『ネイチャーパイロット』1巻 天沼俊 集英社

(17) は森山 (1992) が疑問型情報受容文と名づけて分析を試みている、話し手がそれまで未確認である情報 (事態) を自ら発見した、もしくは第三者から伝達された際、「～カ」という疑問文の形式を用いてその情報 (事態) を受け入れ (把握し) たことを示す文である。このような疑問型情報受容文に後接する「ヨ」も心的態度の顕在化を示す機能を有する「ヨ」と考えられる。つまりこの場合も単に話し手が「(でてきた料理が) うどんである」といった情報を受け入れたことを示すだけでなく、「ヨ」を用いて当該事態に対して話し手が「不快である」といった心的態度を有していることを述べていると考えられる。この種の「ヨ」が (8) などのこれまでの述べ立て文に後接する「ヨ」と同様の機能を有していることの証左として、

(18) 山沖「(でてきた料理が) うどんかよー、と思った」

(18) のように話し手の思考内容を取り上げる引用部の内部に入ることが可能であること、

(19) (戦いに参加できず撤退することになったレイド。撤退する飛行船から遠くなっていく戦いの場であった町をみながら)

レイド：出番のないまま撤退かよー。 テレビアニメ『ドキドキ伝説 魔法陣グルグル』

(20) (家出したなぎさを迎えに来た雅斗、その雅斗が自分の荷物を持って部屋から出てくるのを見たなぎさの弟淳は、雅斗がなぎさをあきらめて帰ると考える)

雅斗：よお。

淳：(なんだ、こいつ…なぎさの事あきらめて帰る気かよ)

なんだよ、絶対連れて帰るとかエラソーな事言ってるっ…

オレ、見損なったぞ。

『なぎさ Me 公認』6巻 北崎拓 小学館

(19) のような話し手が想定できない独話場面での使用例や (20) のような漫画などで心内発話として表現された例も実際に存在することがあげられる。

その他にも、行為要請をおこなっているとは考えにくい次の (21) のような命令文に付加された「ヨ」や (22) (23) などの形式上疑問文の形をとっているが聞き手への情報要求が見られない文に後接する「ヨ」⁸⁾ なども同様の機能を有しているものと考えられる。

(21) (約束通り来なかった聞き手に)

ちゃんと三時に草加駅に来いよー。

(21') 「ちゃんと三時に草加駅に来いよー、と思った」

(22) (突然訳もなく殴られる A)

A : 何するんだよー。

(22') 「何するんだよー、と思った」

(23) (さらわれたエリーを助けるためやってきたムジカ、しかし仲間のハルがなかなか現れない)

ムジカ : (時計をみる) あいつ何もたついでだよー。

あと 30 分しかねえぞ。

テレビアニメ『レイヴ RAVE』

(23') 「あいつ何もたついでだよー、と思った」

(21) の命令文の場合、発話で表される状況やそこから導きだされる発話時までの状況「三時に草加駅に来る」「結局三時に草加駅には来なかった」に対する「遺憾」といった心的態度を有していることを「ヨ」が顕在化している。また (22) の疑問文の場合、「聞き手が話し手を殴った」という答えに対しての「遺憾」といった心的態度を有していることを示していると考えられる。またこの (21) (22) (23) の発話も (21') (22') (23') のようにすべて話し手の思考内容を取り上げる引用部の内部に入ることが可能であり、聞き手のいない状況で発話することも可能であることから同種の機能を有する「ヨ」であることがわかっていく。

以上、「ヨ」が独話場面に用いられるといった問題を手がかりに、「ヨ」に「当該の発話が発話に対する話し手の心的態度 (遺憾・不快等) を有していることを述べる」といった機能が認められることについて述べた。

3. 3. 「ヨ」の機能③

最後に発話によって表された情報が聞き手に帰属するような場合に付加される「ヨ」について考えてみる。以下に例を再掲する。

(1) (妻の反対をよそに市長選に立候補する芳彦)

芳彦 : 市長選に立候補するよ。

房子 : あなた…… (絶句) (中略) 本気でいってるの?

芳彦 : むろん本気だ。

房子 : やめてください。 あなたは大学の先生ですよ。

当該の発話で表された事態「芳彦が大学の先生だ」は、聞き手の職業といった個人的事実に関わることで当然聞き手にとって自明である。いわば最も聞き手側にある情報といえる。であるにも関わらず「ヨ」が付加されている。以下の例も同様に発話で表された事態が聞き手に関するものである。

(24) (市長選のさなかに妻の浮気が発覚し離婚すると言い出した候補者(芳彦)と妻の母親いさ子との会話)

芳彦: よし、今すぐ別れよう。

いさ子: ちょっと待って。

芳彦: 房子がいい出したんです。私にも全く異存はありません。明日にでも市役所へ行って、離婚届をもらってきなさい。その場でハンコを押して決着をつけようじゃないか。

いさ子: いい加減になさい。あなたは市長選の候補者ですよ。

『善人の条件』(92年鑑代表シナリオ集) 映人社

この場合も「聞き手が市長選の候補者である」といった事態は、立候補者本人が自分が候補者であると知らずに立候補することなど考えにくいので聞き手にとって自明である事態と考えられる。

まずこういった発話に付加される「ヨ」の特徴であるが、次のように

(25) (a) 房子: やめてください。あなたは大学の先生ですよ

(b) ?あなたは大学の先生ですよ

(26) (a) いさ子: いい加減になさい。あなたは市長選の候補者ですよ

(b) ?あなたは市長選の候補者ですよ

「ヨ」が付加された(a)と取り除いた(b)とを比べると(b)の発話は不自然な発話に感じられる。このことから、この種の「ヨ」の付加は非常に随意性が低いことがわかる。また常に上昇イントネーション「ヨ↑」を帯びるなどといったイントネーションの特徴も有している。ではこの種の「ヨ」はどのような機能を帯びているのだろうか。

その機能を説明する手がかりは、こういった発話が、発話を意味のあるものとして解釈するためには字義通りの意味だけでなくある種の言外の意味を推論によって導き出し発話を解釈しなければならないことにあるのではないかと考える。例えば(1)の場合

(27) 大学の先生である者が、市長選挙などに立候補するべきではない。

(27) のような言外の意味の前提を呼びだし、

(28) 芳彦 (話し手⁹⁾) は、市長選に出るべきではない。

(1) と (27) から (28) のような言外の意味を推論によって導きだし発話を解釈しなければならないだろう。以下 (24) も同様の処理が必要である。

(29) 芳彦 (話し手) は、市長選挙の立候補者である。(字義通りの意味)

(30) 市長選挙の立候補者は、言動に注意すべきだ。(推論の前提)

(31) 芳彦 (話し手) は、離婚するべきではない。(言外の意味)

こういった言外の意味の導出が前提となる発話に付加される「ヨ」について、本稿では「当該の発話が字義通りの意味とは異なる内容(言外の意味)を有していることを述べる」つまり言外の意味の存在を顕在化させる機能を有した「ヨ」であると規定する¹⁰⁾。こういった言外の意味を前提とした発話は、話し手側に聞き手の発話解釈に対する責任があり、話し手の情報意図が正確に伝わらなかった場合の責任は聞き手と比べて話し手側により強くある。つまり言外の意味を前提とした発話は、ある種のリスクが伴う発話といえる。当然話し手としては、少しでも言外の意味の存在を聞き手により明確にし、その導出を促し聞き手の発話解釈が話し手の意図通りに行われたという、リスク軽減の動機が生まれる。このような話し手の動機とこういった発話における「ヨ」の付加の随意性の低さから考えてもこういった「ヨ」の機能の規定は妥当なものではないだろうか。

また当然ながらこの種の「ヨ」は、言外の意味の導出を促す聞き手の存在が不可欠であり聞き手が必ず存在する場面ではしか使用されない。次のように「と思う」テストにおいても

(24) ?いさ子：あなたは市長選の候補者ですよ、と思った。

(1) ?房子：あなたは大学の先生ですよ、と思った。

話し手の思考内容を取り上げる引用部の内部に入ることができず、この機能を有する「ヨ」が聞き手非存在では成立しえない文であることがわかっていく。この種の機能を有する「ヨ」は聞き手の個人的事実以外の言外の意味の導出を前提とした発話にも用いられる。最後に間接応答文¹¹⁾などにおける「ヨ」の使用例を掲載しておく。

(32) A : Do you like rugby?

A : 君は、ラグビーが好き?

B : I am a New Zealander.

B : 僕は、ニュージーランド人ですよ。

(Blakemore 1992)

(33) A (話し手) は、ニュージーランド人である。 (字義通りの意味)

(34) ニュージーランド人は、ラグビーが好きである。(推論の前提)

(35) A (話し手) は、ラグビーが好きだろう。 (言外の意味)

以上、ここでは「ヨ」が話し手側に情報があると見なされない場合に用いられるといった問題を手がかりに、「ヨ」に「当該の発話が字義通りの意味とは異なる内容(言外の意味)を有していることを述べる」といった機能が備わっていることを述べた。

4. 「ヨ」の使用制約について

これまで、従来の研究の問題点に触れながら「ヨ」が有する機能について考察してきた。最後に「ヨ」の使用が制限される文脈について述べることにする。伊豆原(1994)、楠本(1995)などのように従来「ヨ」の使用制約については、話し手と聞き手との関係、つまり待遇上の問題¹²⁾を中心に議論されることが多かった。確かに「ヨ」の使用と話し手と聞き手との待遇上の問題とが関わっていることもあるだろうが、ここではそれ以外の要因による使用制約、特に「ヨ」が持つ②と③の機能との関係から「ヨ」の使用制約について検討する。

具体的な検討に入る前に、②と③の機能を有する「ヨ」の共通する特徴とその使用動機について触れておく。まず②の機能を有する「ヨ」は、当該の発話にある種の心的態度が存在することを示すものであった。また③の機能を有する「ヨ」は、当該の発話に言外の意味が存在することを示すものであった。この②と③の機能を有する「ヨ」は、いずれも当該の発話に字義通りの意味以外に何らかの意味が存在することを明示的に示すものであり、この字義通りの意味以外の意味が存在することを明示的に示すといったことが②と③の機能を有する「ヨ」の共通する特徴だと考えられる。またこういった機能を有する「ヨ」を話し手が使用する動機として、この字義通りの意味以外の意味の存在を示すことにあると考えられる。

この②と③の機能を有する「ヨ」の共通する特徴とその使用動機から予測されることは、こういった字義通りの意味以外の意味の存在を示す必要がない、もしくは示すことが許されない文脈において「ヨ」の使用が制限されるのではないかということである¹³⁾。では字義通りの意味以外の意味の存在を示す必要がない、もしくは示すことが許されない文脈とはどのような文脈なのであろうか。それは、次に示す実況中継のような眼前の状況をありのまま伝えることのみ許されるような文脈である。

- (36) (ラジオの野球放送) アナウンサー：

「さあ明青学園九回ツーアウトまでこぎつけて、尾知商業5番桐山のカウントはツーナッシング。マウンド上の上杉大きく振りかぶって投げた。空振り3振。ゲームセット。明青学園優勝。」
テレビアニメ『タッチ～Miss Lonely Yesterday あれから、君は・・・～』

- (37) オペレーター「敵戦艦のダメージ65パーセント。ナデシコの重力波砲が有効に効いていません…。しかし敵戦艦の重力波砲は封じ込められました。相転移エンジンに異常確認！！。次元歪曲防壁出力低下！！。重力波砲使用不可能です。」

戦艦の艦長「今…何かシールド見たいなものに拡散されたように見えたけど…」

オペレーター「確認しました。次元歪曲防壁です。」

『遊撃宇宙戦艦ナデシコ』1巻 麻宮騎亜 角川書店

(36) はラジオの野球中継でアナウンサーが状況を実況中継している場面であり、(37) は戦艦のオペレーターが艦長へ状況報告をしている場面の発話である。どちらの場合も目の前で起こっていることだけを述べることのみが必要であり、あえてそれ以上のことを述べる必要があるとされない文脈である。実際このような文脈の発話に「ヨ」を付加すると何か不自然な発話になる。

- (36') ?アナウンサー「さあ明青学園九回ツーアウトまでこぎつけて、尾知商業5番桐山のカウントはツーナッシングですよ。マウンド上の上杉大きく振りかぶって投げましたよ。空振り三振。～」

- (37') ?オペレーター「敵戦艦のダメージ65パーセントですよ。ナデシコの重力波砲が有効に効いていません…。しかし敵戦艦の重力波砲は封じ込められましたよ。～」

(36') (37') といった発話の不自然さは、話し手(アナウンサー)と聞き手(ラジオのリスナー)との待遇上の問題だけで説明することは困難であろう。こういった文脈において「ヨ」が使用されると不自然なのは、当該の発話にある種の心的態度や言外の意味といった字義通りの意味以外の意味(この場合眼前の出来事以上の意味)の存在が感じとれるからであろう。

以上「ヨ」の機能との関わりで、「ヨ」が「眼前の状況をありのまま伝えることのみが必要とされる(許される)ような文脈」においてその使用が制限されることを述べた。

5. まとめと今後の課題

ここまで従来の研究では扱いきれない「ヨ」の使用の存在を指摘し、その問題点を踏まえながら改めて終助詞「ヨ」の機能についての考察を行ってきた。その結果、以下の表1で示す通り「ヨ」には少なくとも三つの機能が備わっていることが明らかとなった。

表1 終助詞「ヨ」の機能

終助詞「ヨ」の機能		聞き手存在の有無	独話用法の有無
①	言述、命じ、尋ねといったいわゆる発話の力 (illocutionary force) を話し手が聞き手に強調する	有	無
②	当該の発話が発話に対する話し手の心的態度 (遺憾・不快等) を有していることを述べる	必ずしも必要ではない	有
③	当該の発話が字義通りの意味とは異なる内容 (言外の意味) を有していることを述べる	有	無

これまであまり取り上げられることのなかった「ヨ」の独話用法や様々な文タイプとの共起をとりあげた点、これまでとは異なる枠組みで（話し手の聞き手に対する発話解釈の意図といった観点等）で新たに分析を試みた点は、今後の「ヨ」の研究、引いては終助詞研究にとって意義のあるものとなったのではないかと思う。

もちろん本稿には今後に残された課題がいくつかある。まず①②③の各機能の相互関係がいかなるものであるのか考察する必要があるだろう。現時点では、三つの機能は、ある一つの基本的機能の現れ方の異なりであると考えられる。その基本的機能とは「当該の発話に字義通りの意味以上の意味¹⁴⁾が存在することを明示する」である。①であれば、字義通りの意味以上の意味である「述べている」「尋ねている」「命じている」といった発話の力の存在の明示化であり、②であれば、事態に対する心的態度といった意味の存在の明示化であり、③であれば、言外の意味¹⁵⁾といった意味の存在の明示化であると考えられる。①②③の機能は、字義通りの意味以上の意味の存在を明示するという点において同じである。ただ①②③で明示される意味は、すべて字義通りの意味以上の意味であることにおいては同じであるが、それぞれ発話行為に関わるもの、命題態度に関わるもの、推意に関わるものと、話し手が復元するように意図する意味については異なりが存する。

ここで問題となるのがそれぞれの機能の「ヨ」がとる音調の異なりである。つまり、同じ基本的機能を有する同一語である①②③の「ヨ」が、何故異なる音調をとるのかといった問題である。これは、話し手が復元するように意図する意味の異なりが、音調に反映している

からではないだろうか。このような音調の異なりがなければ、聞き手は字義通り以上の意味のうちどのような意味の復元を話し手が意図しているのか考えねばならず、発話解釈の処理の負担が大きくなる。また話し手にとっても、意図する解釈が行われぬというリスクが高くなる。こういった聞き手の発話解釈への負担軽減、発話解釈の失敗のリスクの軽減という理由で、同一語でありながら異なる音調をとるのだと思われる。しかし音調については、前節の語句へのつき方や、①の機能を有する「ヨ」の音調の更なる分析が必要である¹⁶⁾と思われる。

また上記以外にも、本稿における「ヨ」の機能と従来の説¹⁷⁾との関係や意味論的機能¹⁸⁾との関係についても考察する必要がある。また他の文末形式や助動詞などとの関係及び相互承接の問題なども残された課題である。

* 本稿は日本語文法学会第3回大会(2002年12月8日、於同志社女子大学)での口頭発表をもとに加筆・修正したものである。席上貴重なコメントを下された諸先生方、また有益で建設的なご意見を下さった査読者の先生方に感謝申し上げます。尚、本稿における不備、誤りは言うまでもなく筆者の責任に帰するものである。

注

- 1) もちろん80年代以降の研究すべてが情報(知識)や認識といった概念を用いて行われたわけではなく、田窪(1992)(1998)、金水(1993a)、田窪・金水(1996)など、彼らの提唱する「談話管理理論」の枠組みにそって行われた研究など、それ以外の観点からの研究もある。
- 2) 発話の力の強調とは、「述べている」「尋ねている」「命じている」といった発話行為述語の復元を聞き手に積極的に働きかけることであると考えられる。どのような場合に「ヨ」の付加によって聞き手に積極的に復元を促すのかといった付加の動機については更なる検討が必要であると思われる。脚注3)に付加要因についていくつか述べておく。
- 3) この機能を有する「ヨ」の付加を統一的に説明できる要因を見出すことは非常に困難であるが、ここではいくつか考えられる付加要因を述べておく。①物理的要因(聞き手と話し手との間に物理的に遮断するものがあり聞き手の存在を話し手が確認することができないといった場合等)②心理的要因(聞き手が自分と違う認識を表明しそれに反ばくする場合や著しく自分の面子をつぶすような認識を聞き手が表明しそれに反ばくするといった面子を守る場合等)その他「帰ってきたんだよ、俺達は」などの倒置文において前にもってきた文の要素を強調する場合などが考えられる。
- 4) 「と思う」テストとは、仁田(1991)や森山(1997)において当該の発話が聞き手不在で使用されるかを思考動詞との共起関係を用いてテストする方法のことを指す。
- 5) 後述するが、基本的にこの機能を有する「ヨ」は、独話・対話の別なく用いられる。論証の都合により、先に独話での使用に言及する。
- 6) 独話場面における「ヨ」の使用に関しては、対話場面や他の機能の「ヨ」の使用と比べて世代差、地域差があるようである。各機能の「ヨ」の使用と位相差といった問題は「ヨ」のみならず終助詞全体の問題であるので今後の課題としたい。
- 7) こういった「ヨ」の文法性判断であるが、アニメや映画などの会話やインターネット上で公開されている日記などでも同様の「ヨ」の使用(変質者「すみません……」刹那「はい?」よく道を聞かれ

- るのでまたかよーと思ったんですが)を見つけることができる。このことから、こういった「ヨ」の使用が容認可能であると考えても良いだろう。ただ位相差などによって文法性判断が揺れる可能性も否めない。さらに綿密な文法性判断の確認と「と思う」テストの有効性について考える必要がある。
- 8) 問いかけの文において「ヨ」は、通常下降調のイントネーションをとる。特に情報要求がみられない(22)のような発話の場合、「尋ね」といった発話の力の強調ではなく心的態度を明示する機能を有する「ヨ」と考えられる。また「(授業をサボって教室を出て行こうとする生徒に)どこ行くんだよー」などのように情報要求とも考えることができる発話においても下降調のイントネーションをとり、心的態度の明示化であるように思える。確かに問いかけの文に「ヨ」がつくと非難といったニュアンスが出る 경우가多く、問いかけの文には①の機能の「ヨ」が存在しないようにも思える。しかしこちらに気づかない聞き手に対し「おーい、やまだー、どこに行くんだよー」といった発話は、非難や何らかの心的態度の存在は必ずしも感じられず、情報要求を行っている例と考えられる。またイントネーションもこの場合、下降調であるとしても(22)の発話の音調と同じようには感じられない。このことから、少なくとも問いかけの文にも①の機能の「ヨ」が存在すると言えるのではないだろうか。
- 9) この場合の「話し手」「聞き手」とは、当該の発話を解釈する側、すなわち当該の発話の聞き手側からの視点による。
- 10) 言外の意味の存在を聞き手に顕在化する手段が「ヨ」の付加のみであるわけではないだろう。例えば他の文末形式(「ゾ」等)が有する機能を用いて言外の意味の存在を示すことも考えられる。
- 例) (試験中に言い争いをするパースとミュウ、止めにはいる汐見)
- ミュウ：汐見君。
パース：邪魔しないでよ。
汐見：なにしてるんだよ。今試験中なんだぞ。 ネットアニメ『煌羅万象』
- 11) 間接応答文とは、相手の質問に対して直接不確定な点を明らかにする答えを発するのではなく、間接的に一見関連のない発話で答える応答文のことを指す。
- 12) 楠本(1995)では「ヨ」の使用やその制限について「敬意の表明が必要な場面では、「よ」の使用は制限されるが、情報内容が聞き手にとって有用で聞き手に対する配慮を有するものであれば、「よ」は義務的に付与されなければならない」と述べている。
- 13) 本稿のこういった考え方に近いものとして井上(1997)がある。井上は「終助詞なしの発話「P φ」は、基本的に事柄Pの内容を述べるだけの発話であり、それのみあつた対応として聞き手に求められるのは「聞いてその内容を理解することぐらいである」と述べ、次のような聞き手に「聞いて内容を理解する」こと以上の対応を求めない場合(次の場合手順を説明するだけの場合)「ヨ」は用いられないとしている。
- 例) 文章を保存する場合はですね、まず「ファイル」というところをクリックします(??よ)
井上(1997)
- つまり単に事柄だけを伝達することが必要とされる文脈において、「ヨ」が付加されると不自然であるという考えでありほぼ本稿の考え方と一致する。
- 14) この場合の字義通りの意味以上の意味とは、関連性理論における、命題態度や発話行為表現といった高次表意(higher-level explicature)、推意(implicature)に相当するものであると考えられる。
- 15) ここでの言外の意味とは、厳密には推意(implicature)のことを指す。
- 16) 「ヨ」の基本的機能とそれぞれの機能との関係については、音調の更なる分析が必要であると思われる。その為には、アニメや映画だけでなく、自然談話での使用や音調を含めて考察する必要があるだろう。また分析者の母方言(近畿方言)の影響も考慮しなければならない。この点に関しては、今後

の課題としたい。

- 17) 本稿は、金水 (1993a)、田窪 (1998) などと同様に「ヨ」の意味・機能が本質的には聞き手の知識や情報帰属とは関係がなく、必ず聞き手に対して向けられるとは考えない立場をとる。その点においては、「ヨ」の規定に何らかの形で聞き手を含みこんだ規定とは異なる。もちろん、聞き手の存在が前提となるような「ヨ」の使用があることは認めるが、それは情報帰属のあり方ではなく、例えば話し手が自分に対して推意の導出を明示して促すといったことが考えられないという理由によってである。ただ情報 (知識) や認識といった概念を用いて考察された研究についても、本稿で提唱する規定との関係についてさらに考察していく必要はあると思われる。
- 18) 金水 (1993a)、田窪 (1998) など考察されている「ヨ」の「一つの文脈を前景化または生成し、当該の命題をその文脈に転送せよ (金水 1993a, p.65)」「情報を I-領域に記載せよ。これをいま関与的な知識状態に付け加えた後、適当な推論を行え (田窪 1998, p.265)」といった意味論的機能と本稿での発話解釈の意図に関わる語用論的機能とどのような関係にあるのかについても考察する必要があるだろう。考察の詳細については、詳しい検討を要し、紙幅の都合上もあるので、ここでは簡単に触れるにとどめる。本稿での語用論的機能とこのような意味論的機能は相容れないものではないと思われる。意味論的機能が当該の情報を関与的な文脈に転送・推論を促すことを示し、語用論的機能は、転送された情報に対する適当な推論の方向を示すのではないだろうか。つまり本稿における「ヨ」の語用論的機能とは、転送された情報に対しての具体的な発話場面での高次表意や推意の導出といった発話解釈の処理の仕方 (推論の方向性) を示すことを担っていると考えられる。

参考文献

- Blakemore, D. 1992. *Understanding Utterances: An Introduction to Pragmatics*. Oxford: Blackwell.
- 陳常好. 1987. 「終助詞一話し手と聞き手の認識のギャップをうめるための文接辞—」『日本語学』4-10, 93-109. 東京: 明治書院.
- Grice, H.P. 1989. *Studies in the Way of Words*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press.
- 東森勲・吉村あき子. 2003. 『関連性理論の新展開 認知とコミュニケーション』東京: 研究社.
- 今井邦彦. 2001. 『語用論への招待』東京: 大修館書店.
- 今井邦彦. 2004. 「関連性理論」『日本語学会夏期講座 2004 Seminar Handbook』1-27.
- 井上優. 1997. 「「もしもし、切符を落とされましたよ」—終助詞「よ」を使うことの意味」『言語』26-2, 62-67. 東京: 大修館書店.
- 伊豆原英子. 1994. 「終助詞「よ」の使用と使用制約—情報と待遇性の関わりから「よ」の使用条件を探る—」『名古屋大学日本語・日本文化論集』2, 43-63.
- 神尾昭雄. 1990. 『情報のなわ張り理論—言語の機能的分析』東京: 大修館書店.
- 金水敏. 1993a. 「終助詞ヨ・ネの意味論的分析」『学習と対話』Vol.93 No.1 日本認知科学会 学習と対話研究分科会資料 13-19.
- 金水敏. 1993b. 「〈言語学の最新情報〉—日本語学 終助詞ヨ・ネ」『言語』22-4, 118-121. 東京: 大修館書店.
- 楠本徹也. 1995. 「終助詞「よ」の待遇性に関する一考察」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』21, 1-14.
- 益岡隆志. 1991. 『モダリティの文法』東京: くろしお出版.
- 森山卓郎. 1992. 「疑問型情報受容文をめぐって」『語文』59, 35-44. 大阪大学国語国文学会
- 森山卓郎. 1997. 「「独り言」をめぐって—思考の言語と伝達の言語—」川端善明・仁田義雄 (編) 『日本

- 語文法 体系と方法』173-188. 東京：ひつじ書房.
- 西山佑司. 1999. 「語用論の基礎概念」『岩波講座 言語の科学 7 談話と文脈』1-54. 東京：岩波書店.
- 仁田義雄. 1991. 『日本語のモダリティと人称』東京：ひつじ書房.
- 大曾美恵子. 1986. 「誤用分析 1 「今日はいい天気ですね。」—「はいそうです。」」『日本語学』3-9, 91-94. 東京：明治書院.
- 大曾美恵子. 1991. 「「でしょう」「よ」とイントネーション」『日本語教育論集』1, 40-50. 関西外国語大学 留学生別科.
- 佐久間鼎. 1952. 『現代日本語法の研究《改訂版》』東京：恒星社厚生閣. (復刊くろしお出版)
- 泉子・K・メイナード. 1993. 『会話分析』東京：くろしお出版.
- 白川博之. 1992. 「終助詞「よ」の機能」『日本語教育』77, 36-48.
- 白川博之. 1993. 「「働きかけ」「問いかけ」の文と終助詞「よ」の機能」『広島大学日本語教育学科紀要』3, 7-14. 広島大学教育学部日本語教育学科.
- Sperber, D. and D. Wilson. 1986. *Relevance: Communication and Cognition*. Oxford: Blackwell.
- 田窪行則. 1992. 「談話管理の標識について」『文化言語学—その提言と建設—』東京：三省堂.
- 田窪行則. 1998. 「談話管理理論に基づく「よ」「ね」「よね」の研究」『音声による人間と機械の対話』257-271. 東京：オーム社.
- 田窪行則・金水敏. 1996. 「複数の心的領域による談話管理」『認知科学』3-3, 59-74.
- 時枝誠記. 1951. 「対人関係を構成する助詞、助動詞」『國語國文』20-9, 1-10. 京都大學國語學國文學研究室.
- 上野田鶴子. 1972. 「終助詞とその周辺」『日本語教育』17, 62-77.